

## 「原点」を見つけない

富山県立高岡高等学校

中川 恋響 かれん

今日は家族にとって特別な日だ。

「はい、いらつしやい……」

母の声が、吹き抜けの廊下を抜けて二階の私の部屋まで響いた。あつ、あのおじさんだ。

毎年この日は、必ずあのおじさんが家に来られる。家族は急いで下の和室に集合だ。白髪交じりの頭に、丸い眼鏡をかけていて、決まってコンビニで買ったと思われる六本入りのビールと、何種類かの味がある棒が付いたアイスクリームの箱を手土産にして。

おじさんと会うのはもう十七回目だ。私は今年十七歳、生まれてから毎年おじさんと家で会う。夏休み、この日は楽しみのひとつだ。私が生まれる前のことだ。私の祖父は、周りの人からとても信頼され尊敬されていた。そのため、二十回近くも結婚式で仲人をしたそうだ。このおじさんの結婚式も祖父が仲人をした。

祖父が天国に行ってもう二十五年になる。

祖父は、退職する約一ヶ月前に人間ドックを受けた。そこで病気が見つかった。手術は成功したが術後に肺炎となり数日後に、あつという間に天国に行ったそうだ。九月からの再就職先も決まっていた。そこで着るスーツも近所の洋装店で新調した。ネクタイもだ。

おじさんは、祖父が亡くなつて毎年欠かさず祖父の命日に家に来られる。祖父の遺影に会いに来られる。毎年毎年、欠かさずにだ。「まいどー、あつちでお元気ですか？来るなと言われても来ますからね」

と、おじさんのお約束の言葉が和室に響く。毎年、おじさんは祖父についてたくさんの話をしてくれる。会ったことも、話したこともない祖父、でも家族や、このおじさんから毎年いろんな話を聞いて、祖父のことは結構知っている。身長は昔にしたら大きいほうでなかなかのイケメンだったらしい。バリバリ仕事ができ、たくさんの部下がいた。でも、実は犬が怖かったり、タコが嫌いだったり。祖父は、自分の部下だった人が、毎年毎年命日に家に来てくれて自分の話をしているのを天国から見えてどう思っているのかな。きつと喜んでくれているだろうな。おじさんの話を聞いていると、いつもすごく祖父に会いたくなる。亡くなってもう二十五年になるのに、皆の心の中には、まだまだ祖父は生きている。

今年はおじさんがとてもステキなプレゼントを持ってきてくれた。なんと、おじさんの結婚式の写真だ。おじさんは今とは違って、

真つ黒な髪でスラッと痩せていて、かなり格好いい。驚きはそれだけではない。結婚式の動画も持ってきてくれた。スマホに録画してだ。優しいような笑顔の祖父がそこにいた。和室の鴨居に掛けてある写真は、真面目な顔で少し怒っているようにも見える。この写真とは違い、ずっと笑顔の祖父がいる。

動く祖父を見るのは初めてだった。声を聞くのも初めてだ。少し低い声だが、スピーチはとても温かく、すごく通る声だ。真面目な内容からの笑いをとるオチに、かなりの文才を感じ聞き入ってしまった。

「さすが、おじいちゃんだ」

私は思わず叫んだ。やはり祖父は想像通りに凄かった。素敵なサプライズに、そこにいる祖母と母はずっと涙していた。すごく、すごくうれしかった。涙している祖母も同じ仲人の席にいて、若くて可愛い。

二時間ほど楽しい時間を過ごし、そろそろおじさんが帰られる最後は、祖父の写真に、

職場や自分の近況を話される。今までの、あぐらをかき、テーブルに肘をついて冗談まじりで話す様とは一変して、直立して真面目にだ。その後ろ姿は、毎年見慣れた光景だが、今年は動画を見たせいか違って見えた。自然に涙が溢れてきた。なぜ毎年来られるのか、少し分かった気がする。新入社員から一人前になるまで育てたのは祖父だと聞いている。いま頑張っている姿を見せに来られているのと同時に、おじさんは、自分の「原点」に会いに来られているような気がした。初心を思い出しに来られているような。

人と人との出会いは、どこでその出会いが運命になるか分からない。そして、別れがきても、ずっと心の中で生き、想ってあげられる人がいることは幸せだと思った。私はそんな人に出会うことが出来るのだろうか。また、私はこれから、他人から想ってもらえる人間になれるのだろうかと考えさせられた。

祖父の命日の数日後はお盆になる。祖父が

着るはずだったスーツは今年も和室にかけられた。そのスーツを見て、今年は、少しでも祖父のような人に近付きたいと思った。これからいろんな経験や出会いがあるだろう。それが運命の出会いや、人生の「原点」となることもあるだろう。関わった人からの恩を忘れず、感謝し、人生を大切に生きていきたいと思う。

(富山県小矢部市)